

「せとうち発見の道」企画展

「地域の文化財をつたえる
～門田貝塚と長瀬薫～」

2018年5月29日（火）～8月26日（日）

瀬戸内市民図書館

国指定の史跡である門田貝塚。2000年前のくらしはどんなものだったのか、門田貝塚のある地域はどのような地域だったのか？のこされた文化財から何がわかるのでしょうか。郷土史研究者・長瀬薫を中心に、門田貝塚が国の史跡に指定されるまでの経緯などもあわせて紹介します。

門田貝塚(門田遺跡)

門田貝塚(邑久町尾張)は、吉井川が形成した沖積地の自然堤防上に立地する弥生時代前期から中世まで及ぶ集落遺跡です。

昭和8年(1933)、長瀬薫により発見され、その後数回の発掘調査が行われました。遺跡の中心は弥生時代前期の貝塚で、大量の貝殻と土器や石器、骨角器などが出土しました。門田遺跡からは奈良・平安時代の建物の柱穴なども見つかっています。

昭和60年(1985)、弥生時代前期の貝塚を伴う貴重な集落遺跡として国の史跡に指定されました。現地では竪穴住居なども復元されて「門田貝塚史跡公園」として整備されました。

門田貝塚発見の父 長瀬 薫

明治26年(1893)、邑久郡邑久村山手(現瀬戸内市邑久町山手)に生まれた長瀬薫は、青年時代から古物、史跡などに興味を持ち、邑久郡を中心に調査・研究活動を行いました。

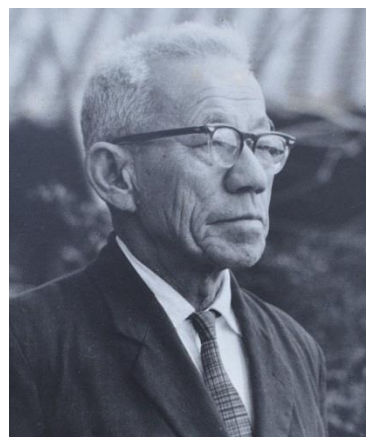
門田貝塚をはじめ多くの遺跡を発見し、遺物の収集につとめ、昭和11年(1936)、私設の「邑久(おく)考古館(こうこかん)」を開設しました。

温厚な性格で、該博な知識と抜群の記憶力を持ち、調査や案内にあたって労を惜しむことは無かったといえます。

昭和45年(1970)2月14日逝去。享年76歳。



門田貝塚史跡公園



長瀬 薫

門田貝塚 発見から史跡公園になるまで

郷土史研究者・長瀬薫によって見いだされ、調査が始められた門田貝塚。学術的にも注目され、近藤義郎（故人・岡山大学教授）をはじめ多くの考古学者の協力を得ながら、邑久町教育委員会、岡山県教育委員会などが史跡整備のための調査を行いました。

そのような文化財保護の取り組みが続けられ、1985年、門田貝塚は国の史跡に指定されました。現在は「門田貝塚史跡公園」として親しまれています。

- 1930年（昭和5）4月、長瀬薫が初めて現地を試掘（第一次調査）
- 1933年（昭和8）6月、長瀬薫による発掘調査（第二次調査）
- 弥生時代の貝塚と確認され「門田貝塚」と命名される**
- 1934年（昭和9）2月、長瀬薫・水原岩太郎による大規模な発掘調査（第三次調査）
- 1935年（昭和10）5月、長瀬薫による発掘調査（第四次調査）
- 1950年（昭和25）3月、長瀬薫・川崎務による貝塚部分の発掘調査（第五次調査）
- 4月、ミシガン大学日本研究所リチャードK. ビアズリィによる貝塚部分の小発掘調査
- 4月、鎌木義昌（岡山県学生考古学会員）による調査
- 弥生時代前期後半の土器を「門田（下層）式」と呼称
- 1962年（昭和37）3月、邑久町教育委員会主催の第一次発掘調査
（近藤義郎・長瀬薫ほか多くの考古学関係者が参加）
- 1966年（昭和42）3月、邑久町教育委員会主催の第二次発掘調査
貝塚の形成状況、住居跡などを確認
- 1982年（昭和58）5月、岡山県教育委員会による発掘調査、遺跡の範囲を確認
弥生時代から鎌倉時代までの遺跡であることを確認
古代の役所跡なども確認される
- 1985年（昭和60）3月 **門田貝塚の中心部 5,219㎡が国の史跡に指定される**
- 1989年（平成元）指定地全域が公有化される
- 1992～1993年（平成4～5）史跡整備のため、邑久町教育委員会による発掘調査
溝の方向、溝の中の貝層、住居の規模などを確認
- 1998年（平成10）4月 **史跡地の環境整備が行われ、門田貝塚史跡公園として開園**

（敬称略）

参考文献：『邑久町史考古編』

● 邑久考古館（おくこうこかん）から受け継いだ文化財

現在の瀬戸内市邑久町山手に生まれた長瀬薫（1893～1970）は、洋服業のかたわら郷土史の研究活動を行い、門田貝塚や高砂山古墳群など、多くの遺跡を発見し、遺物の採集につとめました。

昭和 11 年（1936）1 月 24 日、長瀬は邑久町尾張にあった邑久公設市場の階上に、日本最初の私設考古館である「邑久考古館」を開設し、門田貝塚の出土品など約 2,000 点を展示しました。その後、考古館は数回の移転をしています。

昭和 41 年（1966）10 月 8 日、邑久考古館開設 30 周年を機に、収蔵品約 28,000 点をすべて邑久町に寄贈し、町立の邑久考古館となりました。

昭和 58 年（1983）11 月、邑久考古館の資料を受け継いだ邑久町立郷土資料館が開館しました。資料館は平成 16 年（2004）11 月に瀬戸内市立邑久郷土資料館となり、平成 28 年（2016）3 月末に閉館しましたが、資料の展示機能は同年 6 月 1 日に開館した瀬戸内市民図書館に引き継がれました。



邑久考古館

● “門田ムラ” の人たちは何を食べていた？

門田貝塚は約 2,200～2,300 年前にできたものです。幅が約 4～5m、深さ約 1.4mの溝を利用して貝殻を捨てたものが厚さ 1m以上にわたり、約 100 年間分積み重なっています。

貝塚のあたりに住んでいた人々は、当時どんなものを食べていたのでしょうか？

貝塚に残された大量の貝殻から、吉井川の河口近くでとられた貝類がよく食べられていたことが分かります。食料とされた動物としては、見つかった骨や歯からみてイノシシ・ブタ・ニホンジカ・タヌキ・ノウサギ・ニホンザルなどがあります。これらは、農耕が始まった弥生時代にも重要な獲物でした。

門田貝塚では、イノシシがシカに比べて多く見つっていますが、ともに幼獣はあまり食べていなかったようです。骨の中には故意に割ったものがあり、骨の中の髄を取り出して食べたものと思われる。また、イノシシの下あごに孔（あな）があげられているものがあり、木の棒に通して吊り下げられ、農耕や狩猟の「祈り」に使用されたものと考えられています。

土器の中には、底にコメ（粳）の圧痕が残っているものもあります。当時、近くでコメがつくられ、食べられていたのでしょうか。

このように、貝塚に残されたものから、当時のくらしが詳しく分かってきます。貝塚はタイムカプセルのような役目を果たしているのです。



動物の骨などで作られた道具（骨角器）